

総 説

日本行動科学学会65年の歩みとウィンターカンファレンス40年の歴史¹⁾²⁾

柳 井 修 一^{3)a}, 権 藤 眞 織^b, 今 田 寛^c

東京都健康長寿医療センター研究所 実験動物施設^a,

神戸親和大学文学部^b, 関西学院大学 名誉教授^c

〒173-0015 東京都板橋区栄町35-2^a

Sixty-five Years of the Japanese Association of Behavioral Science:
Celebrating the 40th Anniversary of the Winter Conference

Shuichi YANAI^a, Maori GONDO^b, Hiroshi IMADA^c

Animal Facility, Tokyo Metropolitan Institute for Geriatrics and Gerontology^a,

Faculty of Literature, Kobe Shinwa University^b, Professor Emeritus, Kwansei Gakuin University^c

35-2, Sakae-cho, Itabashi-ku Tokyo 173-0015, Japan^a

The Japanese Association of Behavioral Science (JABS) traces its origins to the Personality and Behavior Disorder (PBD) Society, founded in 1959. Established to bridge basic research and clinical practice, JABS initially held annual conferences each autumn. A major turning point came in 1985, when the Winter Conference was inaugurated under the initiative of Professor Hiroshi Imada, inspired by the Winter Conference on Animal Learning in Colorado, USA. Since then, the Winter Conference has evolved into a distinctive tradition, combining academic rigor with opportunities for open-mindedness, informality, and casual-wear communications. While the structure of the annual meetings has undergone some changes, the Winter Conference has steadily grown in significance and expanded its geographic scope, moving beyond ski resorts after 2010. Celebrating its 40th anniversary in 2025, the Winter Conference now stands as a defining feature of JABS, embodying over six decades of history and scholarly exchanges and development.

Key words: 60-year history of JABS; 40-year history of the Winter Conference of JABS

1) 本稿は、日本行動科学学会第40回ウィンターカンファレンス（2025年2月19～21日、草津温泉）において、今田寛先生より依頼をいただき執筆したものである。

2) 本稿をまとめるにあたり、過去の大会に関する貴重な情報をご提供くださった先生方に深く感謝申し上げます。

3) E-mail: yanai@tmig.or.jp

2025年2月, 日本行動科学学会第40回ウィンターカンファレンスが開催されました。記念すべき節目にあたり, 本学会の設立者の一人である今田寛先生にご登壇いただいたことは, 大変光栄なことでした。今田先生の講演内容は本号に掲載されていますので, ぜひご覧ください(今田, 2026)。ウィンターカンファレンスが10周年を迎えた際, 今田先生が本会の歴史を振り返る論文を機関誌「行動科学」に寄稿されました(今田, 1995)。本稿では今田(1995)による総括を引き継ぎ, 1995年以降の活動を中心に, 本学会65年の歩みとウィンターカンファレンス40年の歴史を整理したいと思います。

本学会の歴史を語る上で, その前身である異常行動(Personality and Behavior Disorder; PBD)研究会が誕生した経緯を紹介しておくことも必要なことと思います。異常行動研究会は, 実験的基礎研究と臨床を結びつけることを目的に, 5~6人のメンバーによる小さな研究懇話会として1959年に発足し, 1964年から本格的な研究会活動を開始しました。設立のきっかけは, 1959年の日本心理学会大会後に, ネズミを用いた基礎実験を通じて神経症や異常行動のメカニズムに関心を持つ研究者たちが非公式に集まり, 情報交換の場を作ろうとしたことにあります(今田, 1972)。研究懇話会の設立当時, 日本心理学会が発足して約30年が経過していたとはいえ, 心理学関係の学会数は10に満たず, 日本の心理学界は戦後の混乱期の中での再スタートの時代でした。当時の研究の主流は, それぞれの専門領域で研究データを蓄積し, 専門性を高めていくものでした。そうした中で, 若干20代後半から30代前半の若手研究者が, 基礎研究からの応用を意識し, 基礎と応用の両輪で心理学に取り組む姿勢は, きわめて斬新で意義深いものだったと考えられます。何の後ろ盾もない若手研究者による研究会でしたが, 発足後12年目に「心理学評論」から研究会の紹介依頼を受け, 同誌に紹介論文が掲載されました。これはきわめて稀なことであり, 当時この研究会がいかに学界から注目されていたかということを物語っています。

1960年から1984年までは年1回の年次大会が開催

され, 基礎研究と臨床研究の橋渡しをする学術的交流の場を提供していました。学会活動が秋の年次大会と冬のウィンターカンファレンスの二本立てになったのは1985年のことです。ウィンターカンファレンス開催の契機は, 今田先生がアメリカ・コロラド州で開かれた「第2回 Winter Conference on Animal Learning」に参加されたことにあります。驚くべきことに開催場所はスキー場で, 研究者自身だけでなく, 家族や友人などのプライベートな関係の人々も参加し, 日中はスキーを満喫, 夕食後に学会が始まるというスタイルでした。この会では, 動物学習の研究者たちがインフォーマルな環境で寝食を共にしながら, 通常の学会では得がたい深い議論を行っており, 今田先生のモットー「よく遊び, よく学ぶ」をまさに実現している場でした。この経験を踏まえ, 今田先生は帰国後すぐに当時の事務局(兵庫医大, 磯先生)にこのスタイルを提案し, 翌年の春に岩岳スキー場で第1回ウィンターカンファレンスが開催されました(今田, 1995)。研究会のメンバーはこの提案に誰一人として異を唱えることなく, むしろ歓迎され, 第1回目から盛会となりました。従来から合宿型の研修会などは行われていたと思いますが, 「日中はウィンタースポーツや観光・温泉を楽しみ, 十分に遊んだ後で学ぶ」というスタイルは, 当時の日本では大変に斬新な試みだったといえます。ウィンターカンファレンスでは, スキー場という遊び空間で学閥を越えた自由な交流が生まれました。日ごろ学会では威厳のある先輩がご家族に向ける温かな父親の顔を垣間見ること, 研究への姿勢や背景に対する理解が深まることもありました。こうして, インフォーマルな交流の場だからこそ得られる様々な成果が積み重なり, 研究者同士の自由で密度の高い交流という新たな学会文化が芽生えていったのです。

1994年までの学会活動は今田(1995)の記録がありますが, それ以降の活動は十分に整理されてきませんでした。そこで本稿では, 「日本行動科学学会の歩み」(今田, 1995)に追記する形で, 1995年以降の活動を Table 1 にまとめました。1985年以降, 年2回の学術大会を継続してきた本学会ですが, 2005年頃からはウィンターカンファ

行動科学学会の歩み

Table 1
日本行動科学学会の歩み（1960-2025）

	会名称	会長	事務局長	年次大会			ウィンターカンファレンス			出版物 ^b
				会場	大会委員長 / 大会長 ^a	開催日	会場	大会委員長 / 大会長 ^a	開催日	
1960	異常行動研究懇話会 ^c	佐治守夫		1. 東京教育大	平井久 (早大)	1960/7/16				
1961				早大 (大隈会館)		1961/7/29				
1962				2. 関学大	今田寛 (関学大)	1962/7/9				
1963				3. 同大 早大 (完之荘)	梅津耕作 (精神医研)	1963/9/3				
1964	異常行動研究会 ^d	松山義則		4. 北大	西沢悟 (北大)	1964/10/6				
1965				5. 国立教育会館	祐宗省三 (広島女大)	1965/7/14				1
1966				6. 名古屋共済会館	藤田統 (東京教育大)	1966/10/10				2-3
1967				7	村尾能成 (大阪市大)	1967/7/14				4-5
1968				8. ホテル紫宸殿	平井久 (早大)	1968/7/21				
1969				9. 主婦会館	佐藤峻昭 (東北大)	1969/8/26				
1970				10. 宮城県医師会館	祐宗省三 (広島大)	1970/8/27				
1971				11. 虎ノ門共済会館	杉本助男 (名大環境研)	1971/9/22				
1972		平井久	春木豊	12	関口茂久 (滋賀大)	1972/8/21				
1973				13. 野口記念会館	春木豊 (早大)	1973/9/28				6
1974				14. 広島鯉城会館	園田順一 (鹿児島大)	1974/10/8				
1975		梅津耕作	小杉正太郎	15. 主婦会館	杉山善朗 (札幌医大)	1975/9/4				7
1976				16. 愛知会館	今田寛 (関学大)	1976/9/26				
1977				17. 慶大研究室	佐藤方哉 (慶大)	1977/9/6				
1978				18. プラザ大博多ビル	上里一郎 (広大)	1978/10/13				
1979				19. 上智大特別会議室	茨木 (埼大)・ 小杉 (早大)	1979/9/19				
1980				20. 札幌市民会館	大山正博 (東北大)	1980/8/26				
1981				21. 早大 (大隈講堂)	小杉正太郎 (早大)	1981/9/16				
1982				22. 平安会館	松山義則 (同志社大)	1982/7/11				8-9
1983				23. 早大	小杉正太郎 (早大)	1983/9/11				
1984		今田寛	久野能弘	24. 宝塚紫鹿荘	今田寛 (関学大)	1984/10/11				
1985				25. 東京朝陽館	杉岡幸三 (神戸大)	1985/7/24	1. 岩岳	今田寛 (関学大)	1985/3/7-9	
1986				26. サンパーク犬山	山本豊 (東大)	1986/10/11	2. 野沢温泉	今田寛 (関学大)	1986/2/21-23	
1987		春木豊	茨木俊夫	27. 都立医療技術短大	長田久雄 (都医技短大)	1987/10/11	3. 野沢温泉	荘巖舜哉 (大阪学院大)	1987/3/14-17	
1988				28. 宮浜グリーン ロッジ	鈴木直人 (同志社大)	1988/10/7	4. 野沢温泉	荘巖舜哉 (大阪学院大)	1988/3/10-13	

行動科学 第64巻, 第2号, 2026年

	会名称	会長	事務局長	年次大会			ウィンターカンファレンス			出版物 ^b
				会場	大会委員長 / 大会長 ^a	開催日	会場	大会委員長 / 大会長 ^a	開催日	
1989				29. 早大文学部	加川元通 (中京大)	1989/11/27	5. 定山溪温泉	岩本隆茂 (北大)	1989/3/29-31	
1990				30. 日本福祉教育専門学校	角張恵正 (福祉教育専)	1990/5/31	6. 野沢温泉	小杉正太郎 (早大)	1990/3/19-21	
1991		小杉正太郎	長田久雄	31. 作並温泉岩松旅館	佐藤峻昭 (東北大)	1991/10/28	7. 岩岳	今田寛 (関学大)	1991/3/17-19	
1992				32. 立命館大	藤健一 (立命館大)	1992/9/8	8. 乗鞍温泉	荘厳舜哉 (大阪学院大)	1992/3/19-21	
1993	日本行動科学学会			1. 早大文学部	加藤哲文 (土浦短大)	1993/9/7	9. 志賀熊の湯	山本利和 (大教大)	1993/3/17-19	10
1994				2. サンピア多摩	千葉浩彦 (淑徳大)	1994/10/1	10. 赤倉温泉	佐藤達哉 (東京都立大)	1994/3/16-18	
1995		岩本隆茂	高橋憲男	3. 沖繩ラグナガーデンホテル	荘厳舜哉 (大阪学院大)	1995/10/10	11. 白馬八方尾根	原井宏明 (国立肥前療養所)	1995/1/5-7	
1996				4. 早稲田大学	鈴木晶夫 (早大)	1996/9/9	12. ニセコアンスプリ	高橋憲男 (北海道工業大)	1996/3/21-23	
1997				5. 同志社大	岡市広成 (同志社大)	1997/9/16	13. 白馬八方温泉	坂田省吾 (広島大)	1997/3/17-19	11
1998		岡市広成	磯博行	6. 府中市安田生命アカデミア	杉山尚子 (慶応大)	1998/10/6	14. 蔵王温泉	田多英興 (東北学院大)	1998/3/22-24	
1999				7. 名古屋ガーデンパレス	磯博行 (兵庫医科大)	1999/9/4	15. 立命館大学	藤健一 (立命館大学)	1999/3/13	
2000				8. 同志社大	津田彰 (久留米大)	2000/11/5	16. 樽池高原	内山伊知郎 (同志社大)	2000/3/16-17	
2001				9. 東京ガーデンパレス	嶋崎まゆみ (川崎医療福祉大)	2001/11/6	17. 樽池高原	磯博行 (兵庫医科大)	2001/3/11-12	
2002		長田久雄	大橋靖史	10. 広島大学東広島キャンパス	坂田省吾 (広島大学)	2002/9/24	18. ルスリゾート	和田博美 (北大)	2002/3/17-18	
2003			杉山尚子	11. あいおい損保新宿ビル	長田久雄 (桜美林大)	2003/9/12	19. 妙高高原	青山謙二郎 (同志社大)・川合伸幸 (名大)	2003/3/16-17	
2004				12. 西宮市大学交流センター	嶋崎恒雄 (関学大)	2004/9/11	20. 野沢温泉	獅々見照 (広島修道大)	2004/3/7-8	
2005				13. 山脇学園短大	杉山尚子 (山脇学園短期大)	2005/9/9	21. 妙高高原	杉岡幸三 (神戸大)	2005/3/5-7	
2006				14. 佐賀大学	大元誠 (佐賀大)	2006/11/2	22. 朝里川温泉	和田博美 (北大)	2006/3/17-19	
2007				15. 実施せず			23. 東京神田龍名館本店	杉山尚子 (山脇学園短期大)	2007/3/20-21	12-15
2008		磯博行	川合伸幸	16. 北大 ^{e, f}	和田博美 (北大)・長田久雄 (桜美林大)	2008/9/20	24. 妙高高原	加藤哲文 (上越教育大)	2008/3/16-18	16
2009				17. 同志社大 ^e	青山謙二郎 (同志社大)・漆原宏次 (北海道医療大)	2009/8/25	25. 妙高高原	杉岡幸三 (姫路獨協大)	2009/3/15-17	17-21
2010				18. 兵庫医療大 ^e	磯博行 (兵庫医療大)	2010/9/19	26. 層雲峡温泉	和田博美 (北大)	2010/3/16-18	
2011				19. 桜美林大学 ^e	柳井修一 (都健康長寿研)	2011/9/14	27. 沖繩ポートホテル	上田幸彦 (沖縄国際大)	2011/2/26-28	
2012		津田彰	田中芳幸	20. 東邦大学 ^e	高瀬賢吉 (東邦大)	2012/9/10	28. 妙高高原	磯博行 (兵庫医療大)	2012/3/21-22	
2013				21. 札幌コンベンションセンター ^{e, f}	和田博美 (北大)	2013/9/19	29. 別府温泉	矢島潤平 (別府大)	2013/3/21-22	
2014				22. 京都橋大	坂本敏郎 (京都橋大)	2014/9/9	30. こんびら温泉郷	大木祐治 (四国学院大)	2014/3/19-20	
2015				23. 名古屋大	川合伸幸 (名古屋大)	2015/9/25	31. 安芸グランドホテル	岩田昇 (広島国際大)	2015/3/5-6	
2016		坂田省吾	服部稔	24. パシフィコ横浜 ^g	内山伊知郎 (同志社大)	2016/7/29	32. 妙高高原	坂田省吾 (広島大)	2016/3/13-15	

行動科学学会の歩み

	会名称	会長	事務局長	年次大会			ウィンターカンファレンス			出版物 ^b
				会場	大会委員長 / 大会長 ^a	開催日	会場	大会委員長 / 大会長 ^a	開催日	
2017				25. 久留米大学 ^h	岡村尚昌 (久留米大)	2017/9/20	33. 石川花月荘	松田英子 (東洋大)	2017/2/25-27	22
2018				26. 仙台国際センター ^h	友野隆成 (宮城学院女子大)	2018/9/26	34. 八幡平温泉郷	堀内聡 (岩手県立大)	2018/3/9-11	
2019				27. 立命館大 ^h	田中芳幸 (京都橘大)	2019/9/11	35. 奈良白鹿荘	畑敏道 (同志社大)	2019/2/28-3/2	
2020		内山伊知郎	松田英子	28. オンライン ^h	内山伊知郎 (同志社大)	2020/9/8-11/2 (配信)	36. 野沢温泉	嶋崎まゆみ (兵庫教育大)	2020/2/23-25	
2021			多賀谷智子	29. オンライン ^h	原井宏明 (原井クリニック)	2021/9/1-8 (配信)	新型コロナウイルス感染症のため開催なし			
2022				30. オンライン ^h	島津明人 (慶應大)	2022/9/8-11 (配信)	37. オンライン	松田英子 (東洋大)	2022/3/1-31 (配信)	
2023				31. 同志社大	青山謙二郎 (同志社大)	2023/9/14	38. オンライン	岩野卓 (大分大)	2023/3/18 (ライブ配信)	
2024		松田英子	伏島あゆみ	32. 熊本城ホール ^h	岡村尚昌 (久留米大)	2024/9/6	39. おごと温泉	坂本敏郎 (京都橘大)	2024/2/18-20	
2025				33. 東北学院大 ^h	友野隆成 (宮城学院女子大)	2025/9/7	40. 草津温泉	柳井修一 (都健康長寿研)	2025/2/19-21	

a 年次大会は2013年まで、ウィンターカンファレンスは2012年までが大会委員長。以降は大会長。

b 数字は付録に示したリストを参照。

c 発足は1959年7月23日、北大キャンパスで開催された日本心理学会第23回大会。

d 略称はPBD。

e プログラムの表記は20xx年度年次大会。

f 日本心理学会のワークショップとして開催。

g 国際心理学会 (International Congress of Psychology : ICP) のシンポジウムとして開催。

h 日本心理学会のシンポジウムとして開催。

レンスの比重が高まりました。この頃の拡大運営委員会では年次大会のあり方が検討されており、年次大会を日本心理学会のシンポジウムに移行する案も検討されていました。その結果、2007年には学会65年の歴史で唯一、年次大会が開催されませんでした。翌2008年には日本心理学会のワークショップとして年次大会が開催されました。2009年以降は単独開催、日本心理学会や国際心理学会のシンポジウムとしての開催など、多様な形式を織り交ぜながら今日に至っています。

ウィンターカンファレンスは創設以来、スキー場付近での開催が続いていましたが、2010年以降は開催地を雪深い地域に限定せず、全国各地で開催されるようになりました。この背景には、スキー人口の激減、さらには近年の気候変動による雪不足といった複合的な要因が存在しており、ウィンタースポーツを以前のように気軽に楽しむことが困難になりつつあります。結果として、ウィンタースポーツをしない会員にとって参加しやすくなった一方で、スキーと学術活動を両立できる機会を惜しむ声も聞かれます。

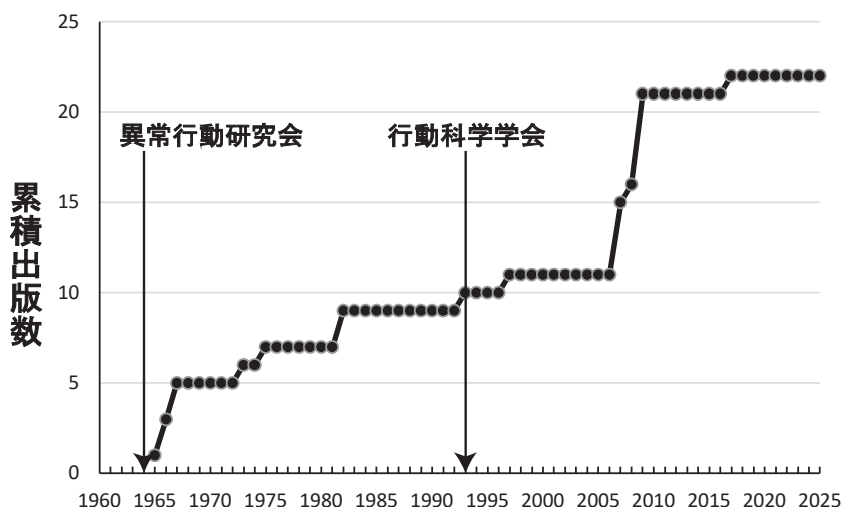
年次大会、ウィンターカンファレンスとも対面開催を基本としてきましたが、2020年のウィンターカンファレンスを対面開催して以降、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、他学会と同様にオンライン配信方式を採用したり、一部、実施を控えたりしながら柔軟な学会活動が継続されました。年次大会は2023年、ウィンターカンファレンスは2024年に対面開催が再開され、今日に至っています。

学術大会以外の活動としては、異常行動研究懇話会の設立以来、本学会では途切れることなく会誌を発行してきました（付録）。また、会誌の発行と並行して、本学会では数多くの出版物も刊行してきました（Figure 1, 付録）。現在は、行動科学ハンドブック企画委員会を中心に新たな書籍の準備が進められており、今後も出版活動のさらなる発展が期待されます。

また、刊行物の発行と並行して展開されてきた学会活動全体の歩みに目を向けると、本学会はウィンターカンファレンスの開始以来40年にわたり、年次大会とウィンターカンファレンスを補完的に運営し、それぞれの特性を活かした交流の場を提

Figure 1

日本行動科学学会における出版物の累積推移



日本行動科学学会（1994年改称）では、その前身である異常行動研究会（1964年設立）時代から各種書籍やブックレットなどの出版活動を継続的に行っている。

供してきました。現在の学界を見渡すと、日本心理学諸学会連合やその他心理学に関連する学会を含め、120を超える学会が設立・運営され、研鑽が重ねられています。専門的領域に細分化された学会が多数設立されている一方で、日本赤ちゃん学会、日本老年学会、日本感性工学会など、近年では複数領域に渡る学際的性質を持つ学会も設立されています。まさに百花繚乱の様相を呈するこのような状況の中で、従来から基礎と応用の両軸を学会のメインの方針として取り組んできた本学会は、一定の社会的意義や役割を果たしているといえるでしょう。今後は、本学会の活動の意義や方向性についても、新たな角度からさらに考察を深め、活発な議論を展開していくことが求められています。

小さな研究会から出発した本学会の背景を考えると、日本心理学会と日程を連動して年次大会を実施してきたことは、大変に合理的な判断だったと言えます。一方で、多数の学会が並立する今、研究発表や交流の場としての年次大会の意義が以前ほど明確ではなくなっているとの見方もあります。また、本学会の特色を語る上で欠かせな

いのが、ウィンターカンファレンスの実施形態です。かつて、「異常行動研究会」という会の名称は、時に肩身の狭さを感じさせることもありました。開催地についても、大学事務局や経理部門から「本当に学会がスキー場で開催されるのか」と確認を求められることがあり、学会の趣旨を丁寧に説明して理解を得る必要がありました。こうした「肩身の狭さ」を巡るエピソードは、今では懐かしく語られる酒の肴の一つとなっています。2025年に第40回を迎えたウィンターカンファレンスは、日本行動科学学会の活動を支える重要な柱として定着しています。今後の開催地の選定にあたっては、学問的交流とレクリエーション活動の両立をどのように図るかに加え、スポーツ以外の企画、例えば地域との連携といった新たな方向性を模索することも検討に値するでしょう。

ウィンターカンファレンスの精神は、今田先生のモットーである「よく学び、よく遊べ」（今田、1995）に凝縮されています。学問的議論の深化と、「背広を脱ぎ、ネクタイを外した」交流を通じた人間関係の醸成は、本学会が独自に築き上げてきた文化です。この伝統を継承し、さらに発展させ

るためには、若手研究者が積極的に参画できる環境を整えることが必要です。また、異世代や多様な専門領域の研究者、さらには実践者、事業者や企業人など、多様な背景を持つ参加者が集える会にすることも、今後の発展に向けて重要かもしれません。会員が切磋琢磨し、時代を見つめ、未来を見つめ、自身の専門領域にとどまらず幅広い領域にアンテナを張っていく柔軟な価値観やセンス、研究姿勢を持つことも求められているのではないのでしょうか。

会の発足時、数名の若手研究者たちは、当時の時代の流れにとらわれず、自らの研究の方向性を主体的に議論し、新しい取り組みに挑戦するフロンティア精神を持って出発しました。その精神と、「よく学び、よく遊ぶ」の理念を本学会の伝統として、学会活動を次世代へとつなげる取り組みを推進することを期待します。変動が激しく予測の難しい時代にあっても、本学会の本質を活かし、柔軟に対応しつつ時代を切り拓きながら、日本行動科学学会がますます発展していくことを願っております。

引用文献

- 今田 寛 (1972). 異常行動 (PBD) 研究会の経緯と活動状況 心理学評論, 15, 261-263.
 今田 寛 (1995). ウィンターカンファレンスの10年を振り返って 行動科学, 34, 1-4.
 今田 寛 (2026). 心理学者・今田寛 90年の歩みと変化を語る 行動科学, 64, 71-89.

付 録

会誌等

1. P.B.D. 研究会誌 (異常行動研究懇話会, 1960-1964年)
2. 異常行動 (P.B.D.) 研究会誌 (異常行動研究会, 1965-1993年)
3. 行動科学 (日本行動科学学会, 1994年以降)

学会出版物

異常行動研究会時代 (～1993年)

1. Eysenck, H. J. (1960). Behaviour and the neuroses. Pergamon.
 (異常行動研究会 (訳) (1965, 第2刷 1970) 行動療法と神経症—神経症の新しい治療理論—誠信書房)
2. 藤田 統 (1966). 初期経験と初期行動 異常行動研究会 (編) 基礎と臨床の心理学シリーズ1 誠信書房
3. 異常行動研究会 (編) (1966). 「初期経験」に関する文献目録 動物編
4. 異常行動研究会 (編) (1967a). 「異常行動における認知の問題初期経験」に関する文献目録: 1967-1968
5. 異常行動研究会 (編) (1967b, 第2刷 1974). 行動病理学ハンドブック 誠信書房
6. 異常行動研究会 (編) (1973). 行動病理学シンポジウム 誠信書房
7. 異常行動研究会 (編) (1975). 脱感作療法: ウォルピと行動療法 誠信書房
8. 浜 治世 (1982). 行動理論と個体差 異常行動研究会 (編) 基礎と臨床の心理学シリーズ2 誠信書房
9. 岩本 隆茂 (1982). オペラント行動の基礎と臨床: その進歩と展開 異常行動研究会 (編) 基礎と臨床の心理学シリーズ3 誠信書房
10. 荘厳 舜哉 (1993). ノンバーバル行動の実験的研究: ダーウィンからアーガイルまで 異常行動研究会 (編) 基礎と臨床の心理学シリーズ4 川島書店

日本行動科学学会時代 (1994年～)

11. 日本行動科学学会 (編) (1997). 動機付けの基礎と実際: 行動の理解と制御を目指して 基礎と臨床の心理学シリーズ5 川島書店
12. 今田 純雄 (2007). やせる: 肥満とダイエットの心理 日本行動科学学会 (編) 行動科学ブックレット3 二瓶社
13. 磯 博之 (2007). 飲む: あなたは何をどのように飲んでいますか? 日本行動科学学会 (編) 行動科学ブックレット2 二瓶社

14. 岡市 広成 (2007). 覚える：覚えたことがなぜ思い出せなくなるのだろう 日本行動科学学会 (編) 行動科学ブックレット1 二瓶社
15. 岡市 洋子 (2007). 元気に老いる：実験心理学の立場から 日本行動科学学会 (編) 行動科学ブックレット4 二瓶社
16. 杉岡 幸三 (2008). 生まれる：発生生物学から見る胎児の世界 日本行動科学学会 (編) 行動科学ブックレット5 二瓶社
17. 青山 謙二郎 (2009). 食べる：食べたくなる心のしくみ 日本行動科学学会 (編) 行動科学ブックレット8 二瓶社
18. 投石 保広 (2009). 休む：ストレスと対処法 日本行動科学学会 (編) 行動科学ブックレット9 二瓶社
19. 中西 大輔 (2009). 決める：意思決定の心理学 日本行動科学学会 (編) 行動科学ブックレット6 二瓶社
20. 島井 哲志 (2009). 吸う：喫煙の行動科学 日本行動科学学会 (編) 行動科学ブックレット7 二瓶社
21. 穴戸 恵美子 (2009). 話す：話すときに何が起きているのか？ 日本行動科学学会 (編) 行動科学ブックレット10 二瓶社
22. 松田 英子 (2017). 眠る：心と体の健康を守る仕組み 日本行動科学学会 (編) 行動科学ブックレット11 二瓶社

(2025年10月16日受稿, 2026年2月4日受理)